<1990>

●人間の“意気地”が試されている
（日本有機農業研究会 機関紙「土と健康」No.209）
●空港建設に反対する公述書
◎天草をつくり変えていく中井俊作さん（草刈善造：月刊 緑健文化）

日本有機農業研究会　機関誌「土と健康」NO.209　'90.1月号

私の発言

人間の〝意気地〟が試されている

中井　俊作

不安と疑問の狭間の中にも好奇心に突き動かされ、義務感に引きずられて世の〝エスカレーター〟に乗っていた私の10代。このままでは人類は破局を迎える、感覚的にはそうとらえられても、では己の人生をどう生きたら良いのか…。人々の生活の奥行きの深さ、その歴史の重さ、システムの巨大さ等々見るにつけ知るにつけ圧倒してくる現実社会を前に、迷いに迷いながら時を過ごした20代。犬も歩けば棒に当る。20代晩期に有機農業、正食（マクロビオティック）の運動との縁を頂き一挙に膨れあがった意識の中で「直耕」の二文字に首根っこを押えられ、父の郷里の天草に着地して食の自給の実現に時を費した30代。「自助しかる後互助」重しとなる言葉を背に野良に立つこと10余年。その間自給の見当がついたところで人心地を得、30半ばで伴侶を迎えて、今は親を呼ぶ二人の娘の声を聞く。

これだけこだわった生き方が許された家の背景を有難く思うがこれは時代のお蔭か。要は（地球生態系の天寿を全うするに足る）永続性ある人の世の秩序の目途をたてたかったのだ。その方策を考え実行するのに必要と思った立場に身を置いた。しかし〝現場〟で過ごした者の感想を述べるならば、事態は絶望的だった。〝富〟と〝人〟は現場から遠くへますます偏在し、〝土離れ〟した人々には取付く島がなかった。問題意識が伝わらなければ問題も認識されようがない。そこへ現れた助っ人がこの一年程の間にマスコミで一気に噴出してきた地球環境問題だった。

一昔も二昔も前よりそれなりに警鐘は鳴らされ続けていたにもかかわらず、とうとうここまできてしまった〝人類の業〟とでもいうべき事態。私達の無責任さと傲慢さを象徴している。結構なことだ。お蔭で世間でいうところの権威や〝力〟に近い人程その見識が疑われるようになった。優れた民族？家柄？地位？成績？…みんなメッキがはがれてきた。生物の生存基盤が揺さぶられる様な時代だ。〝生命〟に対する見識は人に問われる第一の要件となろう。社会的〝分業〟の大本でもある〝食〟が鍵を握っていることは間違いない。無知も無関心も許されない。個人の日常生活レベルから社会の仕組に至るまで具体的な対応が迫られている。「わかっちゃいるけどやめられない」これはもうはっきりと〝文明中毒症〟だ。自らの墓穴を掘るような事態を招いておいて何が文明か！平和だ、自由だ、民主主義だなんていうのもチャンチャラおかしい。こんなのさばり方をしている人間などは戦争でもして自然淘汰されるのが成行というものだ。但し環境破壊を伴う武器は用いるまい。愚かというだけでなく加害する他の生物に相済まない。まずは〝大将〟から、ちゃんと面と向かって名乗りをあげて力一杯やればいい。死骸が見苦しくならぬよう素手が一番好ましい。戦争とまで行かずとも、利害・見解相対立するような時は徹底的に公開討論するのが良い。お互い敵ながらアッパレと思える程のやりとりができれば、答えは立会った人達が出してくれよう。この先の行政の重要な仕事の一つは紛れもなくこの公開の〝土俵作り〟だ。直面する環境問題に対処するにはこれ以外の糸口はあるまい。〝神〟の言葉を借りるまでもなく、自らが己の嘘を正直に見つめる時代となったのだ（さもなくば自業自得となるだけのこと）。素直に生きよう。できることは沢山ある。

（熊本県天草郡五和町大字井芦二六四六）
〒
手野一丁目
TEL & Fax
0969・34・0054

公　述　書

'90. 11. 30

ふりがな　なかい　しゅんさく
氏　名　中井俊作　㊞

（法人の場合には法人名及び公述人氏名）

公　述　内　容
（公述しようとする内容を具体的に記載してください。）

基本的には反対である。
その理由：まだ空港を作って良い条件が整っていない。
その条件とは：企画、推進する側も住民の側も環境問題（せまい意味のものでなく生態系のしくみの理解から、地球環境問題発生の構図まで）を責任をもって受けとめる意識と体制にあること。（いい換えると危機管理の体制も整わないのに安易に便益だけを求めるのは後に災いを生むことになるということ。）
そう判断する根拠：① バラ色の開発構想ばかりが入りそめられている。② 公に問題を提起する場がない（地方議会では大きい問題を扱える状態にない）③ 環境アセスメントも公開されない（判断のよすがとなる情報が住民に届かない＝情報の公開不足）④ 行政側に問題提起しても受けとめ対応できる仕組になっていない（たて割り行政の中では

中央官庁に「予算をつけぬ」と聞き直られることを極端におそれ、面倒な問題には触れたがらない（ばかりかフタをしようとする）

社会の大状況に対して評価することができない＝政治経済状況の後追いしかできない＝(※)現状認識が異なると将来展望、対策のたて方、話の進め方まで大きく異なる＝問題解決の糸口がつかめず平行線をたどることになる。）⑤経済界は収益向上のための自助努力には積極的だが危機管理的対応（環境問題は典型）には政治行政の側からの誘導がなければ企業間競争からの脱落をおそれて歩み出しきれない。

(※)現状認識

行政、経済界側は日本が経済大国となったことを根拠に（いろいろと批判はあっても結局は）うまくやってきたし、今もうまくしのいでいる。今後もやっていけるだろう＝従来程ではないとも経済成長を折り込んで将来展望をたてられる、姿勢を大前提としている。

一方全く別の現状認識がある。日本が今まで経済成長をとげられたのはたまたま条件（国としての立地条件、教育水準…燃料革命、技術革新、…植民地の独立、先進諸国の消費生活の安定…etc）に恵まれていたからで、現在の国際情勢（南北問題の激化、中東情勢の緊迫化、そして地球環境問題）からはこの先は何が起きても不思議でない時代＝従来の延長線上に将来展望をえがかぬことが現実的、という立場。

残念ながらこの二つの現状認識を調整、止揚すべき立場にある政治が、その対応力を持っていない（政治が対応力を持てないというのはせんじつめれば国民の責任にも帰着する）。不幸なことに、行政、経済界側は後者の現状認識に理解不足でおそれてさえいる。一納税者＝住民としてはやむを得ず自衛策を講ずるしかないのが現状。国民に危機管理の意識も体制も整っていない以上そのことを主張することはツトメである（地方から真に発信すべきメッセージ）と心得る。

しかしながら この一年の事態の推移を眺めると 小生も態度を変える方が良いと判断した。今までの姿勢をとり続けると 何故小生が基本的に反対なのか という根拠・真意が伝わりにくいと考えるから。

小生が最もおそれているのは まっとうな現状認識もされない状態で不見識な開発が更に開発を呼び、人の生活態度、生存基盤である自然環境に悪影響を及ぼされることである。(具体的には 現在の天草海洋リゾート構想の展開のしかたに重要な関心を払わざるを得ない。) この点に関しては今後開催されるであろうテーブルで論議し、好ましい解決に向けて歩み出したい。

〈条件付賛成の立場での考え方〉

基本的な受けとめ方

① 天草の交通体系整備のため公共投資がされることは喜ばしいこと

② 税金を使う以上は良い仕事として評価されるものを作り上げること

③ 便益を享受する以上はそれにふさわしい覚悟と代償が求められること。

小生が懸念していること

①に関して：採算性については需要予測の根拠が甘いので地方自治体の財政に負担がかかるのでは。更に航空会社としても需要喚起にせまられ小生のおそれる開発行為に拍車がかかるのでは(当然のことながら自治体の行政ベースでも後押ししよう)

②に関して：ⓐ防災、環境対策に万全を尽くすというが、予定地は天草で唯一の地下水豊富な佐伊津層の水源かん養地域である。佐伊津層地下水の動態メカニズムも充分解明されていない上、アセスの公開もないとは…。ⓑ一般に公共事業では設計、施行の段階から施設の管理・運営に至るまで諸種の基準、規則など、

法に束縛されて住民や利用者の使い勝手の良いものになりにくい。（お金がうまく活かされない，利用者・住民のニーズが反映されない）

③に関して：バラ色の開発論に馴れ甘い期待を寄せる反面、政治不信（利権がらみの構造）と当事者意識の薄くなっている住民（どうせ俺達には関係ない）に対して誰がどのような形でこの先シビアな面での現状認識を伝えられるか。現在の意識状況では本質的には第三世界への好ましからざるODAと同様な構図に落ち込みかねない。

この他にも防災、環境保全、影響を受ける人への生活再建策など個々；具体的に気になる点はあるが、ここでは省略する。

〈おわび〉

故意に将来を悪く考えたり、悪い事態を招こうとする人はおるまい。時代は一歩間違えれば人間活動こそ諸悪の根源となりかねない状況にさしかかっている。不幸なのはその事態が冷静に認識されていないことだ。誠意を尽くして振る舞えば納得の行く合意は形成されるし、それが望めぬ時は人は自衛策を講ずる他はない。小生も置かれた立場で及ぶかぎりの努力を尽くす所存でいる。関係各位の冷静な判断とこちらが安心できる対応を望む次第。　現状では行政の側にも地元の住民の側にも努力シロが残っていると考える。小生も用地補償の方法、その用い方などで公に負担がかからぬよう、或いは今後の住民の自助努力に励みとなるよう、その方途については公共に還元できるやり方を考えている。「予算をつけない」という一声に震え上がる地方行政の体質が、思いがけぬ形で住民に重くのしかかってくる（トラブルを極端におそれ、そのためオープンで明快な議論も対策も生まれない）現実を拝察頂きたい。事は進め方次第で変わるものだ。

月刊 緑健文化
COOPERATIVE LIFE

〒321-12栃木県今市市栄町2083
発行人
社団法人 日本協同体協会
代表 奥村久雄
TEL 0288-26-1219・2038
振替 東京5-24403
1部300円 年間3,000円

緑健文化草の根の旅3

天草をつくり変えていく新農民像 中井俊作さん

草刈善造

天草の中井宅（手野学林）の中庭に立つ俊作さん（右）と筆者（平成1年8月）

反自然の巨都に芽ぶく農魂

中井俊作さんとの出合いは、有斐閣から一方的に贈られてくる「書斎の窓」という図書紹介もかねた月刊誌が奇縁となった。大学教授であるという肩書きだけで、出版目録をはじめ、献本、贈呈印刷物その他の情報の洪水に悲鳴をあげたくなる。熱帯雨林の急速な消失と深くかかわる紙ごみ問題に神経をとがらせながら、処理しきれず、前の菜園の畑で燃やし、木灰がわりの肥やしにするほかはなかった。

そのなかで、ふと目にとまったのが、一昨年の三六六号の特集「農を通して見えてくるもの」の中にある中井さんの「基本的人権としての自給農」の一篇であった。基本的人権というやや固苦しい表現ではあるが、農業は全人類にとって、共通、不可欠の天職であり、少なくとも、最低一ケ年間（四季を通して食物生産の一サイクル）は全国民が、義務教育中に体験しておく必要があると、大学で教育学科の学生だった時代から、確信しつづけてきただけに、ピタリと焦点が合ってしまったからである。

山陰の草深い農村で、貧農の二男（七人兄妹の中）だった私にとっては、貧からの脱却で父母を助ける道は、都市でのサラリーマンに生きるほかはなかったが、その有利な資格条件となる中学校にも進めない貧しさの悪循環。只一つ国費による師範学校のみが残されていた。そこで小学校の高等科（現中学の二年生）卒業と共に鳥取師範に入学。

人口わずかに三万余の鳥取の都市生活で見たものは、食糧を金で買い求めねばならぬ頼りなさと座して金を得る人情の冷さであった。ふるさとの田舎では、貧しかったが大地に足をつけ、黒土に伏して米も野菜も自給できる。どっしりした安定感に溢れる生きざまが、金はあっても吹けば飛ぶような不安定感と対照的にきわだち始めたのである。

この都市生活観は、さらに東京への進学七ケ年の生活で増幅、倍々化されていった。自分自身がそうであったように、地位、名誉、利便、財産、ぜいたく――これらは競争、闘争従って戦争の論理へと発展――を求めて群がる人びとの巣窟であることが、人口三

百万の当時の東京においてさえ痛感されたのである。農聖二宮尊徳の報徳原理を専攻し、石原莞爾の国民皆農（都市解体）農工一体、簡素生活という新文明建設の三原則、都市中心主義文明に対する徹底批判、都市悪の鋭い分析に接しては、東京をめざした〝東京的田舎っぺえ〟の都市観は一大転換を遂げ、ついに北辺の過疎地からの再出発へと拍車をかけられたのである。

さらにこれを補強したのは、ルソーが「エミール」の中で強調するところの「貧乏人の子どもに教育はいらない（それは自然が教育してくれるから、人為的・都市的教育は不要、有害だ、というほどの意味）」という至言である。またこれを裏書きするような「寒さとひもじさで鍛えなくては、心身ともに健康で賢い子どもは育たない」と断言する桜沢如一の人間教育観である。加えて教聖ペスタロッチも、全人（頭・胸・手に象徴される知情意一体の人間）は農民の家庭でのみ育てられると言い切っていることであった。

ところで、私とは全く異質の背景、過密、巨大都市東京生れで、大手製鉄企業に関係する経済的にも恵まれた家庭（大伯父が初代社長、父が子会社の社長）に育ち、早大理工学部の工業経営学科出身という、まさに現代都市文明の先端を行く俊作氏が、なぜ自給農は基本的人権であるなどと主張しだしたのか。貧農に育ち、自給農を教育の基本原理としていただけに、私のお株を奪うほどの若い同志の出現に深い親近感を覚えると共に、都市出身者の中に、なぜこの人間観が芽吹いたのか。至大の関心を抱き始めたのである。

農と基本的人権

自給農を基本的人権と中井氏が強調するようになったのは、天草での十年余の自給簡素生活の体験からであるが、その前に、東京育ちがなぜ天草で農民となったのか、が私にとっては関心事の焦点でもある。昨夏第二回目の訪問の折に、この点についてかなり突っ込んで尋ねたが、後でふれることにし、まず氏の主張に傾聴してみよう。

「実は都市に生れ育った身の上として内心どこかで〝えもいわれぬ不安〟につきまとわれていたのですが、その不安の正体をつかんだ心地がしたのです・・・初めて自分の排泄物＝下肥を汲んで野良に戻した時、ああこれが紛れもない〝生活〟の匂いだ、と合点しました。そして『種をまき、育った作物に手を添え、収穫し調理して口に入れ、残滓・下肥は堆肥に積んで田畑に返す』一連の循環の上に生活の礎がすわった時〝安心〟したのです。これこそ〝人心地〟がついたという感覚でしょう。その人心地を得てようやく伴侶を迎え、親となる気持に至った私でした」と述懐する。

田舎育ちなら自然にいだく都市生活の不安を、都市育ちがいだくのはなぜなのか。生物としての人間が、原体験的にもつ敏感さ、潜在意識なのであろうか。一般的には、都市生れは都市生活によって、麻痺しがちと考えられる鋭敏な帰農感覚を、氏はどうして保持していたのか。同じ東京生れであり戦前〝満州開拓の父〟といわれ、青少年義勇軍の若ものたちから、神のように敬仰された加藤完治の場合はどうであったか。クリスチャンとしての平等の博愛の実践に悩みぬき、自殺を決意して赤城山に登ったが、激しい雷雨に打たれて生への執着が蘇った彼は、生きようと決心した。生きるためには食物を作らねばならぬ。農業は不可欠だった。彼は農学部に学んでいたから、帰農は論理的にも自然、必然でもあったといえる。

「（その気になって時間をかければ）誰にでも（その人なりのやり方で）自分の食物ぐらい自分で作ることができる。この地上に生を受けるということは、自分の食物（親となれば家族の食物）くらいは賄う力量を天は等しく与えて下さっている」と俊作氏の感慨はつづき「自給農は家族総参加の〝生活〟（いわば『大草原の小さな家』の様な）を形作り、その役割分担の中で最も基本的な〝社会性〟を身につけられる。（今日の世間でとり上げられがちの家庭内の問題は大方自己解消してしまうでしょう）」と教育論にも言及してくる。

天草の五和町で農協青壮年部の部長となり、専業農家の跡とり部員を前にしては、自給農（兼業農家につながる）との矛盾に悩み「今日の〝農業が逆に〝農業者〟を亡ぼすようにしか見えてこないのです。食物を〝商品化〟したこと、食物を作る専門家を育てそれを〝業〟としたことは、根本的に大きな誤りを犯している――そう考えると部員に開く口は重くなります。苦し

山林と稲田のほとりに立つ中井氏

まぎれに出る言葉といえばせめて『モノのわかった消費者達と直接提携することだ。地力を落とさぬよう、生態系の循環機能を損なわぬような有機農法を実践することだ』という程度…かくなる上は書き放題！」と舌鋒は鋭さを加えてくる。

「"土離れ"した文明が、かって地上で永続きしたためしがありません。不耕貪食の徒が世の中を悪くする、とは安藤昌益も言いたかったことでしょう。実際に土の上で生活を始めると『悪いこと』をする暇も気もなくなってきます。いかなる社会体制であろうと、人が皆等しく自らの食物を自給自足する程の体験を共有していたら、大した過ちを犯すまい。いくら建前が立派な世の中を作っても"土離れ"した人々の勝手な振る舞いが幅をきかせるようになったら、その社会は危険です。……虚業栄えて実業衰え、自制力を失った文明は破局を迎える…ああ、一体、誰が"農"を職業になどと位置付けたのだろう。どうして人はその不自然さを許してしまったのだろう。何故"自分の食物を自分で作る"という"基本的人権"を一方で投げ出し、他方では奪って平気でいられるのだろう。"お金"はかって人々を身分から解放したかもしれない。しかしお金に替え難い"生活"までもお金に換えてしまうことの不自然さに気付かないのは何故でしょうか？」となげく。

父さんに抱かれた次女クノちゃんと長女たおちゃん

ここでノーベル平和賞に輝くマザー・テレサの偉業を批判するつもりはない。ただ考えさせられたのは、人口一千万余の過密大都市カルカッタに流入する難民、そこに発生する餓死者、ハンセン氏病などを救済、なぐさめ励ますこと以上に重要な根本的課題は、広大なインドの過疎地を活用して、自給自足できるような（難民となる前に）施策はとれなかったのか、という疑問である。骨の髄まで都市中心主義文明に汚染されてしまった人類に「土に還れ」「農に生きよう」と叫んでみても無駄かもしれないが。こうした根本問題に黙々と取り組み解決を進める仕事は、地味でありニュース価値がないのか。問題が起きてから、対症療法的に、莫大な金と時間とエネルギーを費して、劇的に解決（それも、部分的、枝葉的なものに止まる）した場合にのみ注目する世相は、人間の健康生活原理を棚上げして、その結果生じた病気に対してのみ専念する現代治療医学の姿にも象徴されている。

俊作氏の筆はこの文明の変革を志向する教育、世直しへと論及する。「気の毒なのは子ども達です。親が住み始めたばかりに都市で生まれ育つなんて、親と子は"別"です。まず子どもの"基本的人権"を保証してから、自分の将来の進路を考えさせるのが順当というものです。基本的人権を棚に上げて都市で教育を考えること自体、無謀というものではありませんか」これは都市住いしながら、いち早く最新情報を集め、多量の洋書を読みこなし、鋭い文明論や教育観を展開する評論家や大学教授の観念論ではない。

全国民自給農への道を中井さんは次のように提案する。「まずはとりあえず自衛隊から食物の自給自足を始めたらどうでしょう…都市住まいの年金生活者や子供達も、農山村に住むようになれば働き手も戻ります。過疎地は"人里"に還るでしょう。移れる親は子供と一緒に移り、子育てが終ってから、また都市に出るのも良い。誰かが都市の仕事をしなければならぬとすれば、交替で出るのが無難です。そのような仕組を作り、そのようなローテーションを可能とする生涯学習を教育の基本とできるなら…」また「戦争や破局に至ることを考えれば、少々の自制は何のことも

ないでしょう。篠原孝氏言うところの『農的小日本主義の勧め』にあやかるなら、私はそれを支える"農的小日本生活"を勧めたい。できる人からできる所から、まずは都市の人達に"兼農化"をすすめてみましょうか」と。

さらに「しかしこれ以上の"工業の過保護"はもう"病"以外の何ものでもありません。飽食による病には"断食"が最も有効な手だてと考えます。同じく飽食の時代の社会的病理現象に対処するには"社会的断食"が最も無難な治療法になるだろうと考えています。"自然治癒力"を引き出す最良の方法でしょうから」そして最後に「土地の手当と現金収入をどうはかるか。土地については私有財産制度自体の抜本的再検討が迫られることになるでしょうし、収入の方途に関しては、終身雇用、終日拘束的な現在の"職業"をパート化して、ローテーションを組むような方法が適当と考えています。多数の人が望むなら社会の在り方は調整できるでしょう」と結び、基本的人権としての自給農の実現方法をかなり具体化している。

キブツ研修の旅へ

俊作氏は前掲の論文の冒頭で「私は三〇歳から十年余をかけて（玄米菜食をベースにして）食物をほぼ自給自足できるようになりました。現在、妻と娘（四歳）との親子三人で毎月の食費予算は五千円、この内、塩、しょう油、食用油（半量は自給）精米、精粉、種苗代などで約半分を占めますから、他の食品の買物は月二～三千円といったところです。そんな生活（詳しくは日本有機農業研究会機関誌『土と健康』一九八五年八月号に「お金の掛からない私の暮らし」として記載したので省略）を通して見えてきたことを書いてみます」とあるが、二年半前の秋、初訪問の時には、産後間もない次女を連れて秀子夫人が千葉県に帰郷中のせいもあったであろうが、文字通りの徹底した簡素生活に直面した。

桜沢食養法を地でゆく玄米とゴマ塩、煮つめた味噌汁とふかしたサツマ芋が昼食だった。これに私の持参したコマイの干物が唯一つの動物蛋白というところ。私のところではゴマ塩に代わって、手製の味噌（といっても、ゴマ、シソ、わかめまたは昆布、時に小魚などの粉砕したもの、しょうが、にんにく、黒玄米酢、マヨネーズと八種類を混合したところの唾液溢れる美味しい味噌）加えて新鮮な牛乳、自然養鶏卵などもあり、五種類の生野菜の泥状ジュースもつくり、中井宅に比べたらぜいたくかもしれないが、亜寒帯生活に最適と考えていた。桜沢正食を心得たればこその自給生活を実践する氏の真剣さに敬服させられたものである。

キブツ・ニルダビッドの共同大食堂で、日本人グループと語る中井さん（左手前の白いワイシャツ姿）

「虚偽の充満する世の中（支那事変から太平洋戦争へかけての日本）に、青年伊知地君の存在は私をかぎりなく慰めてくれる」と感涙を滲ませた石原莞爾が、この中井青年に接したら同じ感慨を抱くかもしれない。本誌二六八号の「たより」欄の『天草から』でも分かるように、地域の危機（大型海洋リゾート基地、ゴルフ場、コミューター空港の建設、苓北火電反対運動など）を黙視できないところから、正論をひっさげて堂々と対処する生き方、ごまかせない、うそをつけない人がらは、さかのぼれば「過密大都市のなかに芽吹く農魂」という課題に対する本質的解答となるのかもしれない。

正食健康法の創始者である桜沢如一は、健康な人間の条件を七つあげ（生理的な三条件、心理的な三条件、精神的な一条件、合わせて百点満点）精神的条件「絶対うそをつかない」に55点を与えている。他の六条件はそれぞれ5～10点であるのに対して虚偽の反対である真実が、健康な人間の基本条件であることは、易の「天行（大自然、真実）は健なり」（乾ノ卦）という明言からも間違いないだろう。人間はうそつきだが自然は絶対にうそをつかない。安藤昌益が説教、訓戒の釈迦、孔子以上に、この自然に直接し、直耕する農民を天（転）子と讃えたのも当然なことかもしれない。俊作氏が早大高等学院のワンダーフォーゲル部三十周年の記念誌に「自然に、自分に嘘はつけない」という寄稿をしているが、氏の健康な生き方を示唆するものであろう。

ともあれ、病める（虚偽の）文明社会の中で、健康な（真実の）人間が生きぬき、病める文明に挑戦し、健康な社会を建設していくことは容易ではない。むしろ至難というほうが適切かもしれない。しかし不可能ではない。基本的人権の自給農と簡素生活を集団的に実践し、既に八十年の歴史と約三百を数える社会的規模にまで発展した一大公園的文化農工村、高度民主主義協同社会が実現しているのである。M・ブーバーが「理想社会をめざした人類の歴史において、ただ一つの失敗しなかった実験」と評価しているが、さらにそれを越えて成功しつある実顕が中東はイスラエルの地、キブツに見られる。

二千年間、亡国、離散、彷徨の運命に見舞われたユダヤ人が、ゲットーに閉じこめられて、不健康な生き方を強いられ、やがて病める文明の一端の責任をもち、国際的な村八分を味わうことになる。キブツ運動はそのきびしい反省と批判に基ずき、トルストイの農本思想やワンダーフォーゲル運動に刺激された東欧のユダヤ青年たちによる理想社会をめざす祖国建設運動へと発展していく。リターン・トゥ・ザ・ソイル（土に還れ）を合言葉に、遠い父祖たちの農耕生活の伝統を復活し、流浪中に荒廃し砂漠化したパレスチナの大地に、イザヤ書の預言通り、水と緑の沃野を建設することに生命をかけたのである。創設者たちは、博士も教授も、その他すべての肩書き、地位、特権を捨て去り、

一介の農業労働者となって荒地の開拓に汗を流し、健全なユダヤ人生活、ヘブライ文化の復活に青老、男女打ち込んだのである。塩の滲んだ砂漠を貴重な水でクリーニングし、岩山を砕いて植林する作業だけ考えても、想像を絶する苦闘の数十年間であったが、ついにやりぬいたのである。

中井氏も含む日本民族のふるさと復帰（国民皆農）をめざす〝緑健文化〟革命の同志たちが、このキブツの輝く実績（総人口十二万余）に学び、それこそ緑健文化の香る農的小日本〝日本農公園列島〟の誕生に夢と確信をもつためには、ぜひ一度はキブツ生活体験の旅を…と勧めたところ、北米のアーミッシュ訪問を後廻しにして、昨年三月上旬から一ヶ月、キブツ・ニルダビッドの研修団参加となったのである。

もう一つのねらいは、真実に生きるキブツの漸進（自然適応）革命の方法論にも接することだった。真理をそのまま生（なま）でつきつけても、具体化することは至難であり、無理をして強行しても、犠牲だけは大きい割に成果はえられず、やがて元の相に還って再出発という歴史の教訓である。雪崩のような東欧の反スターリン化、自由民主化への潮流はこの感を深くする。真実とは現実に生きて輝く真理のことで、キブツ初期の若いメンバーたちは真理に直進したが、結婚し子どもが生れ、家庭生活が始まると、必ずしも理想通りには進展しないきびしい現実にしばしば直面した。数十年にわたる切実な体験を通して、彼らの学んだものは、理想（真理・原則）は堅持しつつも、迫りくる現実にダイナミックに対処しつつ時間をかけて、除々に（直線コースを取らないで、スパイラルに循環しつつ進む自然法則に従いながら）理想を実現していくことであった。キブツ・ダリヤの創設メンバーの一人であるY・ハラッシュはいう。「キブツは永遠の妥協の椅子である」と。

といって、それは無原則に妥協することではない。可能なかぎり全力をつくすことである。完全菜食主義に対する批判をもちながらも、中井さんは、KLM（オランダ航空）の機内食でも菜食が供与されることを調べて注文し、私も同調した。キブツでは最も早起きを求められるフィッシュポンド（魚池）の作業が主であったが、もちろん、鱗にまみれての生き生きした仕事ぶりによって、メンバーや他のボランティアたちから敬愛されていたようである。キブツに関する詳しい感想や批判は、帰国後も多忙をきわめる同氏からまだ聞く機会もない。キブツには賛同しながらも、その背景となるユダヤ文化、イスラエル国家、パレスチナ紛争などに関する反ユダヤ思想の影響を混え、かなり複雑な感情も入り組み、キブツ観をまとめるまでには、なお時間を要するのかもしれない。

帰農と家庭

俊作氏の人間観、自然観、文明論はもちろん、その育った家庭、そして現に生活し子育てをしつつある家庭ときりはなしては考えられない。氏は評論家ではなく実践者であるだけになおさらである。

反自然のシンボル大東京の真只中に育ちながら、なぜ農魂が芽生えたのか、については、リサイクルジャーナルに連載された「我が帰農の記－実験的生活から－」の中からいくらか拾い出すこともできる。「東京という都市に生まれ育った私はその不自然さに勘付いてはいました」とあるが、生れ育ったところこそ人間的自然であり、なぜ不自然と勘（感）じたのか。これはやはり、後に出てくる自然体験との無意識的な比較を通して、潜在していた自然の子（自然の一部分としての、生物である自分）のめざめ、顕在化と考える以上には、ふみこんで分析することはできない。

「経済的には恵まれていたこともあって、一見ハイカラな生活を送っていましたが、何分自然が恐くてしょうがなかったのです。時折の雷、台風、地震、人間の力及ばぬ威力の存在にただ怯えました…小学校の終り頃でしたか避暑先の信州で出合う『田舎』の子供達がこわくてたまらず、下校途中の少年達の声を耳にして草ヤブに身をひそめたこと…彼等に逞しさを感じ畏れていたのです。この感覚が長じては農民・漁民への畏敬となり、百姓志向の土台になっていることは間違いありません。第一線で自然と向きあい、身を守り、家族を養うその当り前の強さ。しかし同時に『封建的』といわれる言葉で象徴されたその保守性を母から耳で教わる（特に男尊女卑の面）につけ…都会の人間と田舎の人間、同じ日本人でありながら、まるで人種が異なるかの様なその異和感、これは少年時代の記憶です」という回顧談をみると、俊作少年は非常に繊細で敏感な、どちらかといえば神経過敏の性格だったのかもしれない。それに母親の強い正義感に深く影響されたこともあるようである。

「高校から大学にかけて学業以上に私を駈り立てたのは山歩きとスキー、そして車の免許を取得してからは、北海道を除く日本の農山漁村を北から南まで巡り回りました。登山は自然の中で生き抜く技倆を身につけるため、従って単独行動に重点を置きました。スキーは雪国で困らぬように、従って山スキー、いわゆるツァーを志向しました」というように幼少期に芽生えた自然志向は、青春期と共に芽吹き、自然と共に生きる農への事前修練となっていったようである。

この志向を〝反面教師〟となって逆に促進したのが、日本の高度成長とその中に送った理工学部での学生生活へのきびしい批判と反省である。「当時の自分の生活が社会の不条理の上に乗っかりながらの特権であったことをうすう

す勘付いていた居住まいの悪さと、同じく不条理に対して無力に映った講義の内容…私にとって大学とは、両刃の剣である科学技術という人間社会の産物をどう受けとめるか、そのことを考える場であり、東京での生活とは、このヒトを眩惑してやまない巨大都市の正体を見極めることでしたが…都市生活につかったままの姿勢では、都市の正体の見えようもありませんでした。わかっていたことは、このままでは自分は人間失格になる、という不安の確かさ（！）と、思い上がりのようですが、社会の不条理を抱え込んだままばく進する工業化社会の将来に対する危機感の存在でした…人間失格を恐れて百姓志向はますます強くなり、社会の危機感に対しては政治の〝道〟をより一層意識するようになる、これは私の心の内のことでした」とまで考えた俊作青年も、卒業と共に辞退したにもかかわらず、一応、父親の関係する大手製鉄企業に入社の破目となってしまった。

しかし、都市生活と工業の論理に対して、真向から立ち向かう青年の製鉄所勤務が長つづきするはずがない。三年余の勤務は奇蹟かもしれない。遂に父君も見兼ねたのか「お前がその気なら私のかわりに郷里（天草）に戻って政治の道に進んでみろ」と持ちかけられたのである。こうして祖父の郷里（母方も熊本県出身）天草に一歩を印し、すぐ（昭和47年暮の）総選挙に立候補して落選したのである。

帰農のきっかけは以上のような経過を辿ったが、開発の波に洗われるのを待ち望んでいた農山村では、選挙を通じてきびしい反響を耳にしたようである。「お前のようにぜいたくをしてきた人間だから言えることだ」「都市育ちの坊ちゃんに何がわかるか」また正食（玄米、菜食）の知恵を身につけた後でも「ビフテキを食べたことがなければ、一度は食べてみたいと思う」という声も、俊作氏の越えられぬ重い響となって残ったようである。都市に住んでいた頃わからなかったこと、納得のいかなかったこと、つまり『不安』の正体が鍬を握るようになってから、ウロコをはがすように、しだいに見えてきたと語っている。

玄米菜食、自給自足自炊への生活に踏み切ってから、最初の三年間は一年のうちの半分か三分の一は、天草を離れてワンダリングの旅に過した。

「どこに行っても一年生、何をするにも初心者、大学卒であることをすっかり忘れてしまう程、新鮮な驚きと発見の連続でした。東京を起点に旅行していた時と世間が全く違って見えるのです。〝農〟に象徴される自然と人間の直接的な営みの世界は違っている…周囲の自然環境とそれこそ〝自然〟に向き合って生きている人には、どこか爽やかさが漂っています。自然と感応する澄んだ心を宿しているからでしょう。その人が感応している現場に立ち合わなければ気付きません…無心の姿とはその人の真骨頂を表現しているものです…〝詩〟の人も自然と感応しますが、どこか自己陶酔的な匂いがつきがちです。〝信仰〟の人も土から離れている人には、無理か作為を感じます。やはり暮らし全体で関わる〝農〟の人のものが自然で飾りがない」と見ぬくようになっていった。

母屋の縁側で一家全員（左から2人目は隣の子、3人目秀子さん）そろって

「我が帰農の記」では、いろいろな発見や、鋭い文明評論、新しい考え方（哲学、思想など）が、大胆、卒直、謙虚にしかも詳細に記されているが割愛の他はない。ただ一つ「食べることの重さ」の一部を紹介して結びたい。自給自足に加えて、自炊生活もとなると、さすがの中井さんも「終日台所回りで過していると、一体何の為に生きているか、とつい自問します。答は明らかでした。言葉通り〝食べるため〟です。イヤなら止めれば良い…」と自答しつつきびしい反省がつづく。「分業化されて人手にゆだねてしまい、ついそのことに無自覚に頼って平気で過していた自分に気付き、視点が逆転したのです。〝食べること〟台所仕事などに煩わされていたら大の男一匹、人間らしい思索生活など送れない（筆者注―炊事、洗濯、掃除、育児などの煩わしいことはすべて奴隷にさせて、明窓の下、浄机によって思索したギリシャの哲人の流れを汲むアカデミックな西欧哲学の観念論化に対して、洒掃応待の日常生活を教学の始源としたのが、東洋、日本の実践論だったのだが）そんな本末転倒した生意気さが鏡に映ったのです。冷たい水にヒビ割れた手先をシビれさせて下仕事をしていた時、腹の底から熱く湧き上ってくる声は『コトの重さのわからぬ生意気な阿呆者が偉そうなコトを言うならカスミでも食いながら口を叩け、貴

様なんぞの食事の仕度は真平御免だ！」と。

これはさらに「最小限の殺生」につながる。「逆にヒトとして生きている限り、他の如何なる生物も及ばぬ程、多種多様の生物の生命を奪い口に運び続けるというわけです」と述べ「人間の生は万物の死によって支えられる」といったガンジーの食物観を連想させられる。そして「元来、宗教の基本的精神性とは己の口の奴隷であることからも解放を求める、求めようとして精進する過程が行であり祈りとなる。それは最小限の殺生で自分という生物を生かす生活態度として表現される。(従って自らの口を戒めることのできぬ人を私は宗教家とは認めません)」と手きびしい。

最後に家庭の現状にもふれておかねばならない。寫真に見るように、中井宅は夫妻と二人の女の子の四人家族で、四十三歳を過ぎた俊作さんは約五反(水田二反三畝、畑一反三畝、果樹園一反五畝)の自給農であるが、祖父の代に植林した山林約70町歩を預かり、その手入れ代として、年間50万円が生活費財源となっている。自足の簡素生活費月額5千円の内訳についてはすでに述べた。海草は浜に拾いに行くか物々交換。温水器は取外し、冷蔵庫のプラグは抜かれている。太陽熱に温められた黒いパイプから流れる井戸水のきれいなお湯で、昨夏はひと汗流させてもらった。燃料は炭と薪が主で、プロパンは従。情報通信用のラジオ・TVと交通運輸用のジープ一台以外は一昔前に近い生活スタイルだ。が、氏にとっては必要不可欠の望ましい"実験"なのである。

秀子夫人とは製鉄所在勤の頃からの親しい同僚だった。農家出身の血色のよい小太りの体駆が「豆タンク」を連想させ、俊作氏もタンちゃんの愛称で呼ぶ仲であった。その後、会社を退いたタンちゃんは天草に来て一種の"試験結婚"のような一年間を経た後、氏と共に暮らそうと腰を据え"入籍"した。氏を助産夫として二人の女子を自宅で産み育てているが、夫のきびしい生き方、徹底した考え方に適応して行くことは並大低ではなさそうだ。二度にわたって敬遠され、十年前に三度目の妻を迎えた私の体験からも、逆に推察させられる。離婚の危機もあったようだが「いずれにせよ、野良仕事は救いでした。二人でするとはかどりますし、それまでの成行で顔は苦虫を噛み潰したようでいても、心の中では嬉しくなるのです。自然の中での自然な"人の営み"だからでしょう」と俊作さんは達観して語る。夫にそう達観させる秀子さんも、九年余の試練を経た強靭さを秘めて"天草づくり"の地下水となるであろう。

たのしき生涯無病法

田野式健康法の実践とその回復事例

田野泰敏 12

完全生食法の実行は慎重に

椎間板ヘルニヤのOさんは、完全生食を実行して二週間ほどして、自分の体臭のあまりにくさいのに驚いた、といいます。

体臭とは、血液中に含まれる有害な代謝副産物から発生する臭気なのです。

Oさんは、椎間板ヘルニヤが根治した時には、その体臭も消失していたと報告しております。しかも腕立て伏せが二十回も出来るようになっていたと喜びました。

彼は男だから、体力の充実したことに喜びを感じたのでしょう。女性でしたら、肌の美しくなったこと、いやな体臭のなくなったことに、感謝したことでしょう。

ただし、体臭のなくなる前の一時的に猛烈な体臭が発散する場合が多いのです。それは血液の中の不浄物質が皮膚を通して排泄される時の一時的な現象で、こうして自らの皮膚の活力で血液が浄化された方は、もうアトピー性皮膚炎とか、アレルギー性疾患等とは無縁の体質となるのです。傷負けなどということも全くなくなります。

「わきが」も完全生食で必ず根治いたしますが、多くの場合O氏と同様、一時的に猛烈な悪臭が発散する時期があります。そんな時は「ノンスメル」のような吸臭剤をプラスチック容器から出して、両脇下とへそのあたりに糸でぬいつけておけばいいのです。

「わきが」が治ったころは、色白なきめ細かな輝きのある美肌に生まれ変わって、女性なら誰でも喜ぶでしょう。

でも私はそんな見栄の為に完全生食を利用してほしくはありません。

自宅で、指導者もなしに、長期完全生食を行うのは危険です。自宅で行う時は、日数が三倍五倍とかかっても、朝食生食法から始め、出来れば、玄米粉生食法を含む二食生食法までとします。

これを生涯続けて頂くことを切望して止まないのです。これこそ人間の本来の食事法であるからです。

O氏が自宅で長期完全生食を実行された時には、岡山から何回も私のところへ電話をくれ、その都度いろいろに指示を与えてあげました。O氏のように急に歩行困難なほどの頭痛に悩まされた場合は、自宅で強行なさるのもいいでしょう。それは、本人もそれ